

「教科指導実践演習 B」の授業実践から

森口 洋一

(京都教育大学大学院連合教職実践研究科 学校臨床力高度化系)

1. はじめに

筆者は 2022 年 4 月の同志社大学赴任と同時に、京都教育大学大学院連合教職実践研究科に派遣され、学校臨床力高度化系の初任期教員養成コースに所属することになった。初任期教員養成コースにおける「省察」「ゼミ」などに加えて、実務経験を積んだ現職教員を対象とした中核教員・リーダー教員養成コースに設けられた「教科指導実践演習 B」の授業も担当することになった。

公立中学校の社会科教員を経て赴任した前任の教員養成系大学では、3 年間にわたり大学生を対象とした社会科教育関係の教科を担当したが、現職教員を対象とした授業を担当するのは初めてであった。筆者と同じ中学校社会科を専門とする受講生はきわめて少なく、小学校籍の方や中学校籍で社会科以外の教科を専門とする受講生が大半であった。当初は、どのような授業内容が受講生のニーズに合致するのか、戸惑ったのが実情である。受講生から要望や意見をもらいながら、試行錯誤を重ねて少しずつ形ができあがってきた。もちろん完全なものではなく工夫や改良が必要な点はあるのだが、現時点での授業の様子を報告していきたい。具体的には、筆者がこの授業を担当して二年目となった 2023 年度の授業の様子を中心に記していきたい。

2. 授業のテーマと到達目標

2022・2023 年度のシラバスに記載されていた「教科指導実践演習 B」のテーマ及び到達目標は、以下の通りであった。なおシラバスは筆者が赴任前に作成されていた。

表 1 「教科指導実践演習 B」のテーマと到達目標

【テーマ】

- ・それぞれが持つ授業論に対する省察

【到達目標】

- ・フィールドワーク校の研究課題・理論・実践について整理することができる。
- ・改善の視点を定めた模擬授業を行い、省察を行うことができる。
- ・自身の授業実践上の課題や校内の授業改善の課題を明らかにし、理論に基づいた改善案を作成することができる。

この授業のテーマとして、「それぞれが持つ授業論に対する省察」が掲げられ、到達目標の中にも「改善の視点を定めた模擬授業を行い、省察を行なうことができる」と記されている。シラバスでは、グループによる「模擬授業」を行なうことが予定されていた。しかし、グループで新たな授業づくりをするよりも、今までに各受講生が積み重ねてきた授業実践を振り返ってもらい、他の受講生からの批評をもらいながら「省察」する方が、この授業のテーマである「それぞれが持つ授業論への省察」に合致し有意義であると考えた。

またシラバスでは、受講生全員による同一校へのフィールドワークも予定されていた。しかし受講生の校種、専門教科、及び関心分野は様々であり、全員で同一校にフィールドワークをするよりも、各自が関心のある授業に取り組んでいる学校にアポイントを取って、フィールドワークを実施する方が良いと考えた。そのため日時は指定せずに、都合の良い時間帯にフィールドワークに行ってもらうことにした。

その上で理論面での学習を深めるために、石井英真著『授業づくりの深め方』をテキストに指定し、輪読会を行った。現場の教員にとって、日々の授業のために使える「教材」探しのために、授業実践書や教材本に目を通すことがあると思うが、忙しさのために理論的な学習には手が回らない場合が多いと思う。また理論学習を、「現場を知らない学者の現実離れした考え」と捉えて嫌悪する場合もあるだろう。石井氏のこの著書は、研究者でありながら現場の授業実践を踏まえた上で書かれており、実践と理論を架橋するためのヒントが随所に散りばめられている。教育現場は多忙で、目の回るような毎日である。そんな日々の中で、複数の参加者を得て一冊の本をじっくりと読み込み、お互いの意見を戦わせる時間をもってもらい、その上で「教育の根本」を考えてもらいたいと考えた。

表 2 「教科指導実践演習 B」の授業内容

1. 受講生による今までの授業実践記録の紹介→自己省察と実践の共有化
2. フィールドワーク（行き先は指定せず、受講生の関心のある学校（授業）を各自で選択） →授業力の高度化
3. 石井英真著『授業づくりの深め方』の輪読会→理論と実践の往還を意識
4. 『授業づくりの深め方』を読み、課題レポートを提出→批判的思考力の育成

3. 授業の進め方

筆者は 2022 年度からこの授業を担当しているが、ここでは 2023 年度に行なった授業の内容について、具体的に順を追って記述していきたい。

3-1. 受講生による今までの授業実践記録の紹介

当初は模擬授業が予定されていたが、自己紹介を兼ねながら、今までの実践の中から特に力を入れた実践記録を紹介してもらうことにした。学習指導要領は改定のたびに、「言語活動の

重視」「アクティブラーニング」「主体的・対話的で深い学び」といった用語が、キャッチフレーズのごとく並び、それまでの普通の授業は時代遅れであるかのような印象を与えてきた。しかし熱心な現場の教師が積み重ねてきた授業には、既にそれらの要素が取り入れられているのではないだろうか。そのことを再認識するために過去の授業実践を紹介してもらい、論議を深めながら貴重な財産の共有化を試みた。また「臨床力高度化系」においては実習の「省察」に力を入れているが、過去の自身の実践を振り返る、いわば「もう一つの省察」の場としても、この授業を活用してみた。

受講生 13 人の校種は小学校籍、中学校籍、特別支援学校籍にまたがり、小学校籍では人権教育推進、外国籍児童の日本語指導を担当する受講生もおられた。実際の授業実践の紹介は、表 3 の通りであるが、それぞれが担当や得意分野を活かしながら、地道に実践を積み重ねてきたことがよく理解できた。

表 3 受講生による今までの授業実践の紹介

A教諭	公立小学校で人権教育の推進教員を担当し、自転車を使って児童の家庭への巡回指導なども行っている。
B教諭	公立小学校に勤務。当たり前の授業を大切にしてきた。国語の読み物教材では、①一人②グループ③学級全体で考えることを通して、人によって感じ方が違うことを意識させた。社会科の「水」の学習では、校内の蛇口や市内の水道管などにも目を向けさせた。
C教諭	公立中学校で社会科を担当。知識偏重にならない社会科授業の工夫。視聴覚教材、実物教材の活用。主体的に学習に取り組む態度を育成する「まとめシート」作成。発展的課題を設定し、教科書には載っていない答えを考えさせた。
D教諭	公立小学校に勤務。SDGsを意識しながら地域の未来を考えさせる総合学習に力を入れた。回収した廃棄物を再利用して作った楽器を使ったコンサートには、地域住民も多く参加してくれた。
E教諭	公立小学校に勤務。性の多様性を理解させる学習に取り組んだ。職員研修では、性的マイノリティーの当事者の話を聞き取り、「子どもに好きな色を尋ねる」といった教師の言動も見直すようにして改善していった。
F教諭	公立小学校に勤務。地域の小中学校から各校 1 名がメンバーとなり「学びを育むK町メソッド」を共同開発。付けたい力を明確化し、言語活動を重視。転任をしていたクラスでは「教室は間違ふところだ」をモットーに学級を運営。
G教諭	公立の小中一貫学校に勤務。総合学習では各自が卒論に取り組む。研究テーマを設定し、中間発表会を経て完成させていく。修学旅行を研修旅行と位置付けて、情報収集の場として活用している。

H教諭	公立小学校で、子どもが「学ぶ楽しさ」を感じることができる学習を目指し、特に算数教育に力を入れてきた。
I教諭	公立小学校に勤務。総合学習にPBLを取り入れ、探求的な学びを目指した取り組みを行なっている。地域の方とつながりながらフィールドワークも行い、地域の文化財を紹介するパンフレットを作成し、地域にも配布した。
J教諭	大学付属小学校に勤務。伝統文化学習に力を入れている。ネット調べでは深まらないので、祇園囃子を担っている方から聞き取り、和菓子作り体験、西陣織会館での織物体験など本物に学ぶことを重視している。
K教諭	大学付属特別総合支援学校に勤務。知的障害の児童生徒が通っている。大学との共同研究が行われている。作業学習の中では、窯業は失敗してもやり直すことができるので、力を入れて取り組ませている。陶芸ではなく社会生活と結び付け、完成した製品は販売した。
L教諭	外国籍児童が多く在籍する公立小学校に勤務し、学校内に設置された「放課後多文化教室」で日本語指導を担当。保護者支援にも取り組んでいる。
M教諭	公立小学校に勤務。道徳教育に力を入れ、自作の教材も多数開発。「心情理解に偏らない」「結論を押し付けない」ことを大切にした道徳授業を実践してきた。

3-2. フィールドワーク

フィールドワークについては、受講生全員が同一校に赴くのではなく、各自の関心領域に近い授業実践を行なっている学校や学級を自由に選んで参観してもらうことにした。ふだんは時間的に行きにくい遠方の学校を選んだ受講生、逆に自身の勤務校や前任校など身近な学校を選んだ受講生など様々であった。小学校では校内研などで、同僚の教員の授業を参観することは日常的であろう。しかし中学校では同僚の授業を見る機会はそう多くないのが実情であり、勤務校や前任校の同僚（だった）教員の授業を参観することも、有意義な時間になったのではないだろうか。

表4 フィールドワーク先の見学内容

A教諭	不登校支援を行なっているNPOの活動に参加。このNPOには以前から参加。
B教諭	小学校の体育関係の研究会に参加。
C教諭	勤務校で、同じ社会科を担当する教員の授業を参観。
D教諭	関東地方の小学校で、JAXAに勤務した経験を持つ教員の授業を参観。
E教諭	勤務校で行われた、助産師さんを招いた性教育に関する取り組みを参観した。
F教諭	勤務校の小学校の学級会を参観。

G教諭	前任校の中学校の授業を参観。
H教諭	勤務校と同じ市にある小学校にて、算数の授業を参観。
I教諭	国立大学法人附属小の学習研究会において国語の授業を参観。
J教諭	東京都内の私立中学で、実践家の理科の授業を参観。
K教諭	単位制による定時制課程（昼間二部制）の高校を参観。
L教諭	前任の小学校で、外国にルーツを持つ児童を対象とした友好教室（日本語指導）を参観。
M教諭	国立大学法人附属小において道德の授業を参観。

3-3. 輪読会『授業づくりの深め方』

石井英真氏の『授業づくりの深め方』をテキストにして、輪読をすることにした。特定の校種や教科に特化されている本をテキストにすることは、この科目の性格からふさわしくない。石井氏はこの著書の中で専門とする教育方法学の立場から、幅広い教科の授業づくりの方法を論じている。また石井氏が「現場の教員目線を大切にしている」、「理論をかみ砕いてわかりやすい文章で書き表している」ことが、選択の理由である。現場の教員は多忙故に、いわゆる教材本の中のその日の授業づくりの参考になるページにざっと目を通すことはあっても、ゆっくりと1冊の本を読む時間はなかなか取れない。この本を熟読することで理論と実践の往還を意識してもらい、それぞれの持つ授業観を深化してもらうことを意図した。発表者は分担した章のレジュメに加え、討論の柱をつくってもらい、議論を焦点化することとした。

表5 「授業づくりのすすめかた」を使った輪読会における討論の柱の一覧

	討論の柱
第1章 1. 2	「授業の本質」と「教師の力量」「子どもはいかに学ぶのか」を踏まえた上で、自分が担任した子たちは、どんな子たち（クラス）に育つか議論をしてみよう。
第1章 3. 4	みなさんのこれまでの実践の中で、「創発的コミュニケーション」が生まれた実践を交流してみましょう。その実践で、なぜ「創発的コミュニケーション」が生まれたかについても述べてみましょう。
第2章 1. 2	自分の実践を振り返りながら、【時には複数教科のものも参照しながら、教科書を資料として学ぶ授業】【問いと答えの間が長くてドラマのように展開のある授業】について、具体的にどのような授業ができるかを考えて下さい。（どの教科でもOK）
第2章	新学習指導要領では、アクティブラーニングという用語は用いられていませんが、「主体的・対話的で深い学び」への手段として推奨されている。そこで「主体的な

	学び」「対話的な学び」「深い学び」に向けてどんなことを大切にしてきたか。またはこれからどんなことを大切にしていきたいか。
第3章 1. 2	これまでの実践（または、参観した授業等）で、めあての提示の仕方の工夫や、それによる子どもへの効果などを話し合ってみましょう。
第3章 3. 4	「カリキュラムづくりの主人公としての教師」の視点をもとに、これからの授業で意識して取り組んでいくべきことについて、具体的に話し合いましょう。
第4章 1. 2	授業デザイン（教材研究・学習課題の設定等を含む）において大事なことは？（本章のポイントを押さえながら、これまでの自身の授業を振り返って・・・） ㍻
第4章 3. 4	教材研究や授業に「想い」を込めるポイントや手法について、考えてみて下さい。 (思いはどこからやってくるのかという若手教員からの問い)
第5章 1. 2	テキストをもとに、授業の流れと展開（授業展開や単元デザイン等）を考える上で何を大切にすべきか・していること・していきたいかを一つ挙げ、そう考える理由を交流しましょう。
第5章 3. 4. 5	図5-4の②（学習者、教師、教師の関係構造図を示したもの）における、児童生徒と教材との対話を側面から支援する促進者（facilitator）とは、具体的にどのようなことを行なうのだろうか。（授業内・授業外どちらの視点でも良い）
第6章 123	・あなたはどちらかという、表6-1が示すどのタイプの教師ですか。 説明型教師 発問型教師 指示型教師
45	・子どもに「言葉が届く」瞬間とは、どんな場面ですか？
第7章 12	・「評価」について難しく感じている教科はどの教科で、どのような点について難しく感じているのか。 ・「絶対評価」なのに、一部「相対評価」になってしまっている部分はないだろうか。

3-4. 学期末課題レポート

学期末には、『授業づくりの深め方』の第8章もしくは第9章を読んで、批判的考察を加え、A4書きで1600字～2000字程度を目安にまとめる」というレポートを課した

『授業づくりの深め方』は、専門的な内容をかみ砕いて説明し、理論と実践を架橋する構成となっており、この講義に最適であると考えてテキストとして選んだ。現場の教員による批判的

考察を加えることで、教育を取り巻く厳しい状況に対して、この本がどのような有効性を持っているのかを検証する必要があると考えたからである。

具体的には受講生から以下のような指摘があった。「基本的には、(石井氏の提案する)授業づくりの5つのツボ(1. 目的・目標(Goal)を明確化する、2. 教材・学習課題(Task)をデザインする、3. 学習の流れと場の構造(Structure)を組織化する、4. 技とテクノロジー(Art&Technology)で巧みに働きかける、5. 評価(Assessment)を指導や学習に生かす)について、授業力を高めるために必要なエッセンスが詰まったすばらしい本である」と評価している。しかし「事例研究の日常化」について、石井氏が「省察が起こる可能性を高める上では、事例研究の日常化が重要です。そしてそのためには、「学び」の研究としての事例研究を重視し、事前準備に力を入れすぎず、子どもの学びや教室での出来事の解釈を目的とした、リラックスした雰囲気での対話の機会を積み重ねていくことが有効でしょう」。(p336)と述べているが、現実の学校現場においては、児童の問題行動に対する対処に追われ、教師間のあつれきも生じており、「リラックスした雰囲気での対話の機会」は極めて難しいと指摘している。

また別の受講生は、「学校の授業の多くは、この本の中で「こんな授業になっていませんか(p273)と問題視されるような、「教科書で教える」「平凡で」「スキル主義」の授業になってしまっている。問題なのは、ここで提起されている「教科する」授業のやり方を知らないことでない。真に問題なのは、「教科する」授業と言われるような「知識構成的」で、「末広がりな」学習が必要だとはわかっている、そうできない学校現場の状況にある。そのことにもっと目を向けていかないと、この本の内容は「そんなことはわかっているけれどできないよ」「特定の人はやっているけれど、自分にはそんな時間はないよ」と言われるような宙に浮いた話になってしまうように思う。(中略)多くの教師が限界を超えた状態で仕事をしている学校現場で、作者が提起する「教科する」授業ができる教師はむしろ非常に稀有な存在であるし、それが出来ないことは至極当然なことのよう映る」と指摘している。

「働き方改革」があって「理想的な授業づくり」が可能となるはずである。この本の中で石井氏自身も働き方改革について、以下のように言及している。

「子どもをめぐる問題が複雑化し、教職の高度化が求められる今だからこそ、教師が本業である教育活動に専念でき、それにこそ余裕を持って時間がかけられるという意味での「働き方改革」および、信頼と尊厳を持って教師の専門家としての仕事や成長が社会的に支えられ、子どもの成長によって喜びと手ごたえと自らの仕事への誇りを感じられるような「働きがい改革」のための環境づくりが急務です。(P313-314)」

しかし「授業づくり」に関する記述量に比べて、かなり分量が少なく内容も抽象的であることは否めない。

また「職場の同僚性」についても、「授業のクオリティは、教師同士が学び合いともに挑戦し続けるような同僚性と組織文化があるかどうか」に大きく規定されます。すぐれた教師がたくさんいる学校がよい学校なのでは必ずしもなく、その学校にいと普通の先生が生き生きとし

ていてすぐれた教師に見えてくるような、挑戦が認められみんなが高め合っている、**伸びていく空気感のある学校**がよい学校なのです。そして、そうした学校のさまざまな次元の社会関係資本（つながりの力）や組織力を土台として、子どもたちの学力や学びの質は高まっています。（P345）」と述べられているが抽象度が高く、授業づくりに関する提案で見られたような具体的な手がかりが見えにくい。

授業づくりを深めるためには、教師が心の余裕を持って子どもたちに向きあうことができるように勤務条件を整備し、教員が仲間として支え合う同僚性が欠かせない。この本にはそのための具体的な方策が提示されていないことに、物足りなさを感じていると考えられる。

4. 授業アンケートの分析

授業終了後に実施した授業アンケートには、以下のような記述がみられた。

「院生同士の話し合いが楽しかったです。授業実践を語り合うのは、それぞれの教育観が見えて良かったです」

「自身のこれまでの実践を振り返ったり、仲間の実践を聞いたりすることで得るものは大きかった。それぞれの現場でどのような実践をされていたのかがよく分かった」「教師として最も大切と言える「授業」について改めて考えることができました。院生同士で授業実践を交流し合えたことはこの授業ならではの貴重な機会でした」

「授業づくりについて発表したり、他の受講生の発表を聴いたりして、実践的な教育活動について学ぶことができました。現場に戻って、学んだことを生かしていきます」

「他の先生方の実践を多く知ることができ、その中で自身の教科指導の在り方を振り返ることができた」

「皆さんの実践から多くのことを学ぶことができました。これまでいろんな立場でそれぞれが学ばれ実践されてきたものが詰まったものだったからこそ、質が高く、非常に興味も広がりました。自分自身も実践を言語化してまとめることで、ふり返ることができました」授業づくりの大切さやそこでのプロセス、ポイントの中身やその有無など、改めて授業というものについて学びを深めることができた。この授業を通して、現場における自分のこれまでの授業実践を今一度振り返るきっかけとなった。これまではただがむしやらによりよい授業づくりに取り組んでいた、そこに深い理論や考えはあったが気付いてはいないものであったとも感じる。しかし、ここでの学びを通して、自分の実践に対して理論を唱えることが実現できたような気がする。理論を学ぶことで、知らず知らずのうちに取り組んでいたものに価値を付けていただいた、そんな授業となった」

受講生が自身の授業実践を振り返ることで、この授業のテーマである「それぞれが持つ授業論に対する省察」が達成できたと言える。また他の受講生の発表した授業実践を肯定的に捉え、受講生同士が信頼関係を構築し「同僚性」を生みだしている。

また「全ての授業が、院生のプレゼントと院生同士の交流で進んでいたのも、先生（註 授

業担当者である筆者）が授業をしてくださる回もほしかった。先生からの学びも得たかった」
「個人的には、発表の合間合間に先生がお話される内容にとっても興味があり、輪読会もいいのですが、先生の講義をもっと受ける時間があればいいと思いました」という意見もいただいた。授業担当者である筆者自身の中学校の教員時代の授業実践については、自己紹介を兼ねた第1回の授業において、約30年間にわたって中学校現場で活用してきたモノ教材を活用した授業づくりを紹介したのだが、時間が短く物足りないように感じられたようである。

筆者の中学校教員時代は、「生徒の関心意欲を高める授業」「暗記ではなく考える力を育てる」ための授業を目指し、「教科書で教える授業」を心がけてきた。しかし工夫した授業は「教科書を教える教師」から批判も受けたこともある。今では教科書編集自体が大きく変わり、筆者が積み重ねてきた授業の工夫が、教科書の中で随所に取り入れられるようになり、やってきたことが間違いでなかったことを実感している。また文化祭ではフィールドワークで地域の商店街復元マップづくりを行ない、「選択社会科」の時間では、図書室にあったサザエさん全集を活用し「サザエさんで学ぶ戦後史学習」という調べ学習をしたこともある。最近の文化祭は縮小傾向にあり生徒の活動をなくし、外部の劇団や音楽関係の鑑賞をして終わることもあるようだ。「選択教科」については、学習指導要領から削除されてしまっている。このような経験を語ることは「働き方改革」に逆行する恐れもあるが、一人の教師のライフストーリーとして、「参考になるところがあれば取り入れる」というスタンスで聞いてもらうことが良いと思う。

5. おわりに

現職教員である受講生の発表を聞いて、忙しい毎日の中で精魂を込めて授業づくりに取り組んでおられる様子がよく理解できた。6年前まで教育現場にいた私だが、受講生が伝えてくれる最新の教育現場の様子の変わりように、驚くばかりである。また中学校での勤務経験しかない私にとっては、小学校の先生方のお話は初めて知ることも多く勉強になった。すべての受講生の皆さんに深く感謝したい。

大学院連合教職実践研究科で開講されている「教科指導実践演習」は、AとBの二つに分かれている。「教科指導実践演習A」は初任期教員養成コース、「教科指導実践演習B」は、中核・リーダー教員養成コースの院生を対象としている。教職経験のない（浅い）初任期教員養成コースの院生と、経験が豊富な中核・リーダー教員養成コースの院生が交流する場として、この科目を活かすことができないだろうか。

もちろんどちらのコースの学生も、修了や新たな免許資格のために履修している科目は少なくなく、そのうえ実習や修論執筆の時間も必要であり、カリキュラムオーバーロードになることは好ましくない。15回の授業の中で、負担のない範囲で、教科指導実践演習AとBを合同で実施し、中核・リーダー教員養成コースの教員から今までに積み重ねてきた授業実践を聞いて、質疑応答も行い交流する時間を持ちたいものである。またフィールドワークとして、初任

期教員養成コースの学生が、中核・リーダー教員養成コースを修了された方々の職場に赴き、授業を見学させていただくことも、意義があると考えている。

引用文献

石井英真（2020）『授業づくりの深め方』ミネルヴァ書房